

## &lt;前回&gt;オリエンテーション

前期：キリスト教と近代的知

後期：方法論的考察と聖書の社会論

オリエンテーション

## I：象徴・言語・システム

1. 象徴・言語 1
2. 象徴・言語 2
3. 象徴・言語 3
4. システム・宗教

## II：レトリック・メタファー

1. レトリック・メタファー
2. メタファー・モデル
3. イエスの譬え

## III：コミュニケーション・解釈

1. 伝統と意味の地平
2. 多元性と対話
3. イデオロギーとユートピア

12/7

12/14

## IV：宗教と文化——構造と動態

1/18

**I：象徴・言語・システム**

1. 象徴・言語 1
2. 象徴・言語 2
3. 象徴・言語 3
4. システムと宗教

**II：レトリック・メタファー**

1. レトリック・メタファー
2. メタファー・モデル

**3. イエスの譬え****(1) イエスの宗教運動と譬え**

1. イエスの宗教運動 → 「神の国」運動・「神の国」の論理・秩序  
→ 既存の秩序（「敵-味方」の二分法）を批判し相対化する。  
別の秩序をイメージ化する → 開かれた共食  
罪人、女性、子供
2. 新しい隣人理解（自己理解）の現実化としての「神の国」  
隠喩としての神の国
3. これまでの譬え解釈の概要
  - ・ 譬えは、教育的な役割。教義を初心者向けにわかりやすく説明する。  
→ 教義を読み取る。アレゴリカルな解釈・教義的解釈。
  - ・ 譬えは、イエスの宗教運動の基礎資料。イエスに帰れ。イエスの意図と最初の聴衆の理解を再構成する。歴史的解釈・近代聖書学。

↓

聖書神学と聖書学の分裂（原理的方法論的レベルで）

4. エレミアスの譬え研究：イエスの状況と原始教会の状況との比較
    - ・結論：アレゴリカルな解釈は新約聖書自体に遡る
    - ・アレゴリカルな解釈の本質と問題性
      - a. 「共同体の外部と内部の区別」は譬え解釈に次のような役割を与える。
        1. 外部向けの教えの形式→秘密の教え＝奥義を外部の者から守る
        2. 教育
      - b. 隠喩の代置理論(Substitution Theory)＝古い隠喩理論：暗号と暗号解読
- 波多野の用語で言えば、アレゴリカルな解釈は、「文化」（人間性）。

### (2) 近代的な譬え解釈（ユリヒャー以降）

5. 20世紀の譬え研究はごく最近まで、聖書学全体の動向を反映して、ユリヒャーの示した議論の内の歴史性の議論の線上で展開してきた。
6. エレミアス以降、新しい言語論・文芸批評学の影響
  1. 文学性の復権、反歴史主義：構造主義的譬え解釈
  2. 文学性と歴史性とのバランスの回復から思想へ  
言語を媒介・土台とした分裂の克服

↓

解釈学的プロセスに基づく譬え解釈

これは歴史概念と言語概念との本格的な問い直しを要求する。

7. **Adolf Jülicher**, *Die Gleichnisreden Jesu. Zwei Teile in einem Band*, Darmstadt

1976(1888 / 1899)

### (3) 譬え解釈との関わりにおける聖書学の現状

8. 近代聖書学の成立の意義：教義学より聖書学の自立
9. 問題性：
  - 1) テキストの思想性への接近困難あるいは既存の思想への短絡
  - 2) 歴史性、文学性、思想性の分裂状況
  - 3) 聖書学の諸方法の細分化・専門化。方法論上の混乱。  
歴史性、文学性、思想性を、聖書解釈の中に位置づけ直し、統合する必要性。

### (4) 譬え解釈の解釈学的プロセス

芦名定道「宗教的認識と新しい存在」『哲学研究』第559号、京都哲学会 1993年。

「キリスト教信仰と宗教言語」『哲学研究』第568号、京都哲学会 1999年。

#### <譬え解釈の手順>

- 0) 予備的考察（文学的・歴史的・思想的）
  - 1) 歴史性
  - 2) 文学性：構造分析 / 譬えの文学的機能・効果 / 読解プロセスの再現
  - 3) 思想性・思想理解: 神の国はいかなる仕方で現前するか、何をもちたらすか。

#### <構造分析の階層性>

- ・単一の譬えの構造
- ・譬え群の構造
- ・新約聖書の文書単位の構造
- ・新約聖書の構造
- ・聖書の構造

**J.D.Crossan**, *In Parables. the challenge of the historical Jesus*, Harper & Row, 1973.

#### <解釈の試み 1・2 >

**Paul Ricoeur**, "Listening to the Parables of Jesus."

10. イエスの譬え → 神の国の現実の開示（第二度の指示）
- ・言葉の出来事：発見・驚き・喜び → 存在（構想力）の転換 → 実践  
思いがけず・有無を言わず            finding / selling / buying
  - ・受容されていることの認知（受容されていることを受容すること）  
   acceptance of being accepted：テイリッヒ  
   自己との和解
- ↓
- 開かれた食卓、拡大され更新された家族（神の家族）

### III：コミュニケーション・解釈

#### 1. 伝統と意味の地平

##### <言語・隠喩・モデル・譬え>

- ・言語と行為（倫理）・経験
- ・意味と指示

↓

##### （1）近代的思惟の状況

1. 歴史主義と反歴史主義との対立とその後  
歴史と構造の弁証法、リクールの言述の弁証法  
↓  
「宗教」を問う枠組み  
言語論と意味論
2. カント以降の宗教哲学：人間学的転換とその帰結
  - ・実証主義的科学とそれに還元されない学の探究
  - ・形而上学的思惟の復権の試み  
   ウィリアム・ジェイムズ、ホワイトヘッド、トレルチ
  - ・形而上学から倫理・価値論へ、そして言語論と意味論に基づく存在論・人間学へ

##### （2）価値論から意味論へ

3. 新カント主義と神学におけるカント主義  
価値論・価値哲学  
↓
4. 意味概念の包括性と人文・社会学的な基礎論の存在  
構造としての意味（客観性）、生・経験としての意味（主観性）、  
社会性としての意味（相互主観性）＝コミュニケーションの意味
5. 波多野  
アガペーとエロースとの差異  
他者・個／価値・普遍

「人の陥り易き誤解に備えねばならぬ。最も広く行われがちの誤解は多分博愛人類愛など

とアガペーとの同一視であろう」、「限定を超越するという意味及び点においては博愛と名づける場合のあり得るであろう。」(波多野精一『宗教哲学』191頁)

「これほど危険なる誤解はないとさえいわねばならぬであろう。要するにかくの如き愛は寧ろ悉くエロースに属するのである。真のアガペーは決して博く汎ねく人に及ぼすというのが如きことを原理とするものではない」、「この愛は、ひたすら唯ひとりへと注ぎ得る」、「エロースは普遍性への愛であると異なって、アガペーは、むしろ本質上、主体との従って個体との共同として成立つのである」、「根源的意義における個体」(192)、「それは「われ」にとっては生の共同の対手、向こうのもの、「あなた」のものである」(193)

「等しく本質理解の標的を逸する嫌いのあるのは、アガペーを憐憫慈悲などと同一視し、価値低きこと、反価値的なること、欠乏を感ずることなどを、その対象の本質的特徴となすことである」、「「他者」の価値如何は全く問う所でない」(193)

「積極的にのみならず消極的にも何らの価値的限定も存してはならぬ。それは単純に、他者によって規定されること、他者の要求によって規定されること、他者の要求に従うことである」(194)

アウグスティヌス、パスカル

「アガペーのうちに生きたこと」と「アガペーの理論的反省」との区別。

イデアリズム (プラトニズム)

↓

哲学的人間学、現象学、存在論、対話の哲学 (『宗教哲学』)

ハイデッガー ブーバー

## 6. ティリッヒ

1) Ist eine Wissenschaft von den Werten möglich? 1957 (Paul Tillich. *Gesammelte Werke*, Bd.III, Evangelische Verlagswerk, 1965, S.100-106)

Als ich im Jahre 1904 anfang, Theologie zu studieren, waren die Ritschlianer an allen wichtigen theologischen Fakultäten führend. Doch wir, als Studenten und jüngere Generation, revoltierten dagegen aus theoretischen und gefülmäßigen Gründen. Wir wollten die Niederlage der Metaphysik und die Flucht in die Verteidigungslinien der Werttheorie nicht als endgültig hinnehmen. *Wir wollten das Sein*. Und die Erfahrung des Seins als Seins-Macht wurde die existentielle Erfahrung, aus der der größten Teil meines späteren Denkens erwuchs. Heute findet man an den philosophischen und theologischen Fakultäten Europas nur noch wenige Spuren der alten Werttheorie. (101)

Der Mensch ist das wertende Subjekt. Aus unseren Voraussetzungen folgt aber, daß der Mensch aus zu dem Ort werden muß, an dem die einzelnen Werte ihre ontologische Fundierung finden. ... Ihr ontologischer Ort ist die menschliche Natur.

Wenn das richtig ist, dann reduziert sich die ethische Werttheorie auf Anthropologie im Sinne einer philosophischen Lehre vom Menschen. (104)

2) The Idea and the Ideal of Personality, 1948 (Paul Tillich. *Main Works*. 3, de Gruyter, 1998, pp.150-166.)

What, then, about the concept of "religious personality"? The term can be used if it is not meant to signify anything more than a man of religious devotion. But this has nothing to do with the ideal of personality, not even when the man's life is strongly determined by religion or when

S. Ashina

he belongs to the founders and leaders of religion or among the saints. None of these is a "religious personality." Nor should this term be applied to Jesus or Paul, Augustine or Luther. A "religious personality" in the modern sense of the word is a personality in whom religion plays an outstanding role in the building of the personality structure. Religion is thus considered as an important means for the growth of personality. The end is the development of personality, one of the means is religion. In order to "use" religion in this way, its ecstatic, transcending, divine-demonic character must be removed. Religion must be confined within the limits of pure reason or mere humanity. Possession and grace must be denied. The "religious personality" tries to determine its own relation to the unconditional. But, with respect to the unconditional, we can never in any way gain power over ourselves, because we cannot gain power over the unconditional. Religious self-determination is the negation of religion, for the unconditional determines us. This is the decisive criticism of the "ideal of personality." (165)

宗教理解における近代的な人格主義の限界、価値概念の限界。

## 7. 意味概念

意味と指示との区別あるいは関係

体系内の関係性（意味形式）と体系の外部（意味根拠・超合理的偶然的なもの）  
パラドクスと歴史性

↓

### (3) 意味から歴史へ

## 8. 歴史的生成の前提としての構造・体系と、体系の歴史的生成

歴史相対主義を超えて

## 9. 解釈学：意味と歴史から人間存在へ

方法の学から存在の学へ

Schleiermacher から、Dilthey を経て、ハイデッガーへ。

Paul Ricoeur, *La tâche de l'herméneutique*, 1975.

ブルトマン：先行理解(Vorverständnis)

Rudolf Bultman, *Das Problem der Hermeneutik*, 1950. (*Glauben und Verstehen*, Zweiter Band, Paul Siebeck, S.211-235.)

Voraussetzung jeder verstehenden Interpretation ist *das vorgängige Lebensverhältnis zu der Sache*, die im Text direkt oder indirekt zu Worte kommt und die das Woraufhin der Befragung leitet.

von einem gewissen *Vorverständnis* der in Rede oder in Frage stehenden Sache getragt ist. (227)

## 10. ハイデッガー、*Sein und Zeit* (Max Niemeyer, 1972)

世界：意味連関と時間性→歴史性

Dasein / das In-der-Welt-sein / die Weltlichkeit der Welt / Das In-Sein als solches

Die existenziale Konstitution des Da

Befindlichkeit  
Verstehen  
Auslegung  
Rede, Sprache

↓

Als-, Vor-struktur : 理解の地平としての意味 (連関)

*Sinn ist das durch Vorhabe, Vorsicht und Vorgriff strukturierte Woraufhin des Entwurfs, aus dem her etwas als etwas verständlich wird.* (151)

11. ガダマー : 意味の地平と地平融合 (Horizontverschmelzung)

*Wahrheit und Methode*, J.C.B.Moher, 1960(1975).

Dritter Teil: Ontologische Wendung der Hermeneutik am Leitfaden der Sprache.

Sprache als Horizont einer hermeneutischen Ontologie.

Die Dialektik von Frage und Antwort

*die im Verstehen geschehende Verschmelzung der Horizonte die eigentliche Leistung der Sprache ist.* (359)

12. 伝統概念の再構築

宗教と意味の地平

宗教の動態 : 個、決断・逆説、瞬間

共同体、伝統・文化、プロセス

↓

Gerhart Ebeling, *Wort Gottes und Tradition*, Vandenhoecke & Ruprecht, 1964.

Kirchengeschichte als Geschichte der Auslegung der Heiligen Schrift.

Anthony C. Thiselton, *The Two Horizons. New Testament Hermeneutics and Philosophical Description, with Special Reference to Heidegger, Bultmann, Gadamer, and Wittgenstein*, Eerdmans, 1980.

芦名定道『『アジアのキリスト教』研究に向けて——序論的考察』、『アジア・キリスト教・多元性』(現代キリスト教思想研究会) 第8号、2010年3月、79-104頁。

13. 伝統の特殊性と理性の普遍性

ガダマーとハーバーマス

↓

テキストの前の自己理解とイデオロギー批判の相補性

言語世界の内部 (意味連関) と外部 (作用連関)

Paul Ricoeur, *Hermeneutics & the Human Sciences* (ed. by John R. Thompson), Cambridge University Press, 1981.

John Thompson, *Critical Hermeneutics. A Study in the thought of Paul Ricoeur and Jürgen Habermas*, Cambridge University Press, 1981.

塚本正明『現代の解釈学的哲学——デイルタイおよびその以降の新展開』世界思想社。